

## 「月食を撮る(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

満月が昇ってきた時は、うす雲(巻層雲)がかかっていたのだが、高度を上げてゆくと雲がすっかりとれて、快晴に「なってしまった」



満月が地平線に近い場所で大きく見えるのは、目の錯覚である。しかしこの日の満月は「スーパー・ムーン」地球と月の距離が近かったので、目の錯覚ではなく、本当に大きく見えた。



月食が始まるのは21時前。理科準備室で仕事をしながら待っていた。20:40頃、校舎の屋上に行くと、すでに同僚のバウ氏(天体写真家)が撮影を始めていた。私とちがって超重装備で、高級一眼レフを2台、頑丈な三脚に載せてスタンバっていた。



私もデジタル一眼レフカメラを持っているが、今回はコンパクト・デジカメを使ってみた。このカメラは光学ズームの倍率に優れ、暗視野でのオート・フォーカスの俊敏性にも優れる。オーロラの撮影、通常の恒星の撮影も可能なほど、CCDの感度も良い。

月食は、月の見かけの大きさが目まぐるしく変化する。月の形状は異なるものの、通常は約一カ月かけて欠けてゆく「満月→新月」の変化が、1時間ほどで起こる。月の撮影は、黒っぽい「海」やクレーターといった、月面の地形がしっかり写らなければ失敗である。その為には、食分(月の直径に対する欠けた径の割合)に応じて、撮影の露出を刻々と変化させる必要がある。



このカメラはその点も優れている。M(マニュアル)モードが搭載され、ISO感度、シャッタースピード、絞り値などを、任意に変えられる。一眼レフ並みの性能を備えているコンパクト・カメラと言えるだろう。